慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	S・F・ナーデル著『□會構造の理論』
Sub Title	S.F. Nadel : The theory of social structure
Author	十時, 嚴周(Totoki, Toshichika)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1957
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.30, No.12 (1957. 12) ,p.93- 97
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19571215-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

S. F. Nadel;

The Theory of Social Structure

1957, pp. 159, London, Cohen & West Ltd.

S・F・ナーデル著

『社會構造の理論』

I

英國社會人類學におけるナーデル教授の盛名は、その多彩な研究活動とともにつとに廣く世界に知られているところである。氏の研究業績は主として民族誌學的研究と理論的研究の二つの側面に大別されるが、そのことは、後にやや詳しく述べる氏の複雜なキェアーリアとも關連して、社會人類學における獨創的かつ大膽な理論體系化を推進せしめ、二〇世紀後半における一つの優れた理論的水準を示すものといわれている。

本書は、一九五五年母校 London School of Economics での招待講演にもとづき、氏の第二の重要な理論書として出版されたが、出版完了後數日にして、突然、冠狀血塞のために逝去された。享年五三。圓熟期にある氏の急逝は各國の人類學者、社會學者に深く惜しまれている。最後の著作ともなつた本書を前にして、筆者も心からの哀悼の意を表する次第である。

II

Siegfried Frederick Nadel は、一九〇三年ウィーンの法律家の家に生まれ、本來の國籍はオーストリアにあつたが後年イギリス國籍を取得している。氏が社會人類學の領域に關心をもちその專門的訓練を受けようとした時は、すでに心理學と哲學に關する博士號 (Zur Psychologies der Konsonanzerlebens, 1925) をウィーン大學より授與された後のことであつた。なお、さらにそれ以前に、ウィーン音樂アカデミーにおいて作曲、指揮、ピアノ演奏の訓練を受け、デュッセンドルフ・オペラ・ハウス副指揮者、レディオ・ヴィエンナ・音樂プラグラム・プロデュサーとして活躍しており、或いは自己の組織する歌劇團の指揮者としてチェッコに演奏旅行している。その頃、次第に民俗音樂に傾倒し比較音樂學 (comparative musicology) に關心を示して、後に社會人類學に接近する素地がこの時につくられたのであつた。その後、プラーグの民俗音樂國際會議に出席しており、同時に、アフリカ土語の研究をはじめている。後年、氏が優れた言語學的研究を現地調査に結晶させた發端も、すでにその頃にはじまつている。この間、音樂類型論と音樂家ブッソーニの傳記を出版している。

このすでに著名な若き新進の音樂理論家兼演奏家が、未開社會のなにものかに魅せられて社會人類學の新領域に入門したのは、一九三二年、ロンドン大學におけるマリノフスキーの研究會に參加した

時、すなわち結婚後六年を經過した二九歳の時であつた。その後は全ての人類學者が一般に辿る現地調査の時期をアフリカ・北ナイジェリヤ地方 Nupe 族のもとに過し、後年、その優れた民族誌學的研究（Nupe Religion, 1954）を出版している。その間、人類學の博士號（Political and Religious Structure of Nupe Society, 1935）をロンドン大學より取得している。その後、アングロ・エジプト・スーダン政府の政府人類學者となり、同東スーダン地方 Nuba 族の應用人類學的調査に從事し、その間の研究内容は、A Black Byzantium, 1942; The Nuba, 1947 等の民族誌學的著作に發表された。

氏は現地調査においてもつねに第一級の民族誌學者、言語學者であつたといわれ、また、人類學と心理學のボーダー・ラインに關する困難な方法論的問題に對決し、事實觀察と理論分析との關係を深く凝視してきたといわれている。このような實證的研究と理論的探索を經て、現在もなお社會人類學上の名著といわれる The Foundations of Social Anthropology, 1951 が生み出されたのである。それは、音樂にはじまる哲學、心理學、言語學等々の氏の學問的巡禮の一つの融合體であり、一九三〇年當時の機能主義人類學理論に社會システム理論を交合せしめた劃期的な勞作として高く評價される所以である。特に氏の關心を惹きつけたのは、社會學と社會人類學の概念的システムを心理學的分析枠に結合せしめる問題であつたように考えられる。

第二次大戰中は、前述アフリカの諸地方およびエリトリヤ、トリポリタニヤ等において應用人類學的活動に從事し、戰後、ロンドン大學、ダーハム大學における講座を受けもち、その間、人類學關係の各種の國際會議に出席し、また、その人類學上の諸業績によつて數多くの記念メダルを獲得して、戰後の英國人類學者の間の著名な指導者の一人となつた。

一九五〇年以來、濠洲キャンベラに新設された國立大學の Research School of Pacific Studies の初代部長として招聘され、太平洋地域に關する調査研究の組織化のさなか、一九五六年一月一四日、同地において亡くなられたのである。（氏の經歷に關しては、Raymond Firth, American Anthropologist, Vol. 59, No. 1, February 1957, pp. 117-124. Meyer Fortes, A Memoir, in Nadel, The Theory of Social structure, 1957. に、かなり詳しく紹介されている。なお完全なる著作目錄は雜誌《Man》に掲載されている。）

Ⅲ

さて本書は、社會構造の分析を「役割分析（ロール・アナリシス）」の手法から理論化しようと意圖し、かかるアプローチに内在する諸問題の詳細な理論的分析を試みたものである。ここでは、社會構造のマトリックスはその社會のロール・システムによつて提示され、かかるシステムの分析に必要な諸概念用具の展開が本書の中心課題となる。かかる分析手法は、社會行爲理論、社會システム論など現代理論社會學の中心課題とも重複するので、特に同教授に獨自の見解と思われる點を中心にして、その理論構造の概要を略述してみたいと思う。

本書は七章からなる。便宜上、一貫して原文のタイトルを用いる

ことにする。

第一章《Preliminaries》

ここでは「社會構造」の概念の過去の系譜を辿り、それに關する重要な諸姉妹概念――パターン、ネットワーク、ロール・システム、ステイタス、ファンクション――を檢討しようとする。本書の理論體系においては、特に、身分、機能の兩概念を捨象しようとしている點が注目される。この點については後に述べる。

第二章《Problems of Role Analysis》

社會と個人の間の有效な媒介概念としての「役割」の概念を W. Pareto, M. Weber, G. Mead, R. Linton, T. Parsons の線に副つて展望し、著者の觀點からする役割理論の現狀の不備な點を指摘しようとする。その缺陷を克服する手段として、まず「役割の內的構造」を、㈠周邊部、㈡中心部、㈢深奥部、の三つのハイヤラルキーに分類する(三一頁)。つまり、役割に關する基本的中樞的特徵を明徵化するための言語學的、意味論的基準を指定しておくわけである。そうすることによって、例えば、社會心理學一般における役割概念の弱點(三五頁)を、人類學、社會學の立場から克服できるであろうという。

次に、役割の類型(タイプ)を、㈠ recruitment role ㈡ achievement role の二つに分類する(三六頁)。それは、從來の ㈠ ascribed status ㈡ achieved status の兩極概念に對應するが、それと全く同一のものであるというわけではなく、特に「循環的役割」(假譯)とこれ迄の「生得的地位」との間には、その時間的、巨視的、動態的性格において顯著な相違があると述べられている。

第三章《Conformity and Deviance》

役割の相互認知、行動の相互期待に關するそれぞれの相互補足性と、その統制的樣相が取り上げられているが、それは、他の諸社會システム論と全般的に大差なく、別に問題とするところはない。

第四章《Coherence of Role Systems》

もろもろの役割の相互關連――つまりロール・システムの一貫性――の問題が取り上げられているが、その主たる論點は、社會の複合性、異質性とロール・システムの一貫性との關係についてであり、現代社會における役割葛藤の分析に注目している。その分析用具の一つとして、㈠獨立的役割、㈡從屬的役割、の對概念を設定しておく(八〇頁)。前者によって論理的範疇の役割と現實の役割との相互關係が單に存在可能であるような役割、後者によって論理的範疇の役割と現實の役割との相互關係が必須であるような役割、を意味し全ての具體的な役割はこの兩極間の一連のコンティニュームに位置するものと考えられている。この對概念の使用によって、役割葛藤の事象を外的秩序、內的秩序、副次集團等において分析しようとする。

第五章《Degrees of Abstraction》

ここでは、社會理論普遍化に關する抽象水準について論ぜられ、著者の理論體系における一つの科學觀が示されている點、興味深いものが多い。特に、ソシオメトリー、相互行爲理論、スモール・グループ研究等に對するナーデルの批判(一〇九―一一四頁)にその科學觀の片鱗がみいだされる。著者は抽象化の水準を、㈠人間行爲の關係、㈡行爲者の役割とその關係、㈢社會の位置的圖形(ポジショナル・ピクチャー)、の三

つに分類する（一〇六頁、一一四頁）。さらに第三の抽象化水準の分析を展開するために、㈠相互の行爲に對する統御（command over one another's actions）、㈡既存の利益、資源に對する統御（command over existing benefits or resources）、の二つの基準を設ける（一一五頁）。さらにそれらの基準は、次に、六つの價値領域――(i)物質的資源、利益、(ii)社會的威嚴、(iii)認識的諸價値、(iv)感情的、感覺的、美的滿足、(v)道德的諸價値、(vi)先驗的諸價値――に結びつけられて評價の量的スケールにのせられる（一一八頁）。そうすることによつて、役割概念に纏まる外的、質的因子を捨象し純粹に抽象的、分析的な基準枠を構成して、その分析枠に基く理論普遍化の途を拓こうとしている。

第六章《Structure, Time and Reality》

ここでは、著者の理論體系が一種の「モデル理論」であることの性格を説明し、そのモデル性による比較研究の問題、それに內在する巨視的―微視的の關係を述べる。

第七章《Conclusions: Structure and Function》

本書に提起される「社會構造」分析の方法は、㈠ recruitment ㈡ interpersonal command ㈢ relative command over resources and benefits の三つの基本的術語によつて要約される（一五三頁）。第一は位置と關係の想定を支えるメカニック、第二は直接的相互行爲による關係、第三はそれらの關係を間接的に規定する外的基準點、をそれぞれ意味する。さらに統御に關する二つの基準を設定することによつて、社會構造と社會の權力構造とを密着させようとしたのであつた。以上の諸概念用具にもとづいて、それぞれの役割における個人間の相互依存關係、諸役割とその社會との相互依存關係、諸役割によつて構成されるもろもろの集團間の相互依存關係等を解明し、終極的には社會的存在における一般的特徵、諸規律性を發見する手段を準備しようと意圖している。しかしながら現狀は、一方において嚴密な理論圖式を構成するとともに、他方においてはつねにその現實との接合に努力しなければならない狀態にあるという。しかも、人類學理論が普遍化への途を辿るための「比較可能性」を探求するに際して、著者は、新しいロジックと哲學をこの領域に大膽にもちこもうとしている。それを著者は mere positional schemata において提起している（一五七頁）。

そのことの是非はともかくとして、要するにナーデルは、人類學的諸特殊研究を體系化しようとする獨創的な見解を本書に示したのであつた。

Ⅳ

著者の理論體系は、その風變りな經歷とも關連して、全般的に極めて複合的でありその理解がむずかしいとされている。それは、從來の專門分化主義によつては到底きり拓かれなかつたであろうような、廣い視野のもとにおける斬新な理論構造を示している。そのことは、著者のような特殊な經歷をへたものにして初めて成され得る、社會諸科學の統合化のための一つの貴重な業績であるとも考えられるのである。著者の急逝によつてその理論體系の正當な判斷はますます困難となつたが、それにもまして、この領域における偉大な先達の一人を失つたことの損失はいかに强調しても强調し過ぎること

はないであろう。

最後に、著者の理論構造に關する若干の疑問を述べることによって、同氏の冥福を心から祈りたいと思う。

著者は、その理論體系において最も重要なる位置を占める「統御」の概念および「價値領域」の操作によって、構造分析における機能的側面を充分に考慮し得るとされるが、その點に關する圖式的抽象的性格は覆うべくもなく、概念圖式におけるこの部門の脆弱性が指摘されないであろうか。さらに、そのことと關連する「比較可能性」の問題にしても、果して著者のいう正當な評價スケールが構成され得るかどうか甚だ疑問のように思われる。もし役割における質的事象がその評價スケールによって量的事象に正當に還元され得ないものとすれば、比較可能性の問題はなんら解決されたことにはならず、人類學における比較研究の基本點は依然としてポレミックのままに取り殘されることになるであろう。誠にむずかしい問題ではあるが、著者の理論體系によってもなにか氷解しないものが殘されているように思われる。

また、一般に「役割」と「地位」とは不可分の姉妹概念として用いられているが、著者の場合は、役割を「循環的」と「達成的」とに分類することによって「地位」の概念を取り除こうとしている。その點、やや獨創的な見解として傾聽に價いするが、單純、同質的な未開社會の場合と、複合、異質的な現代社會の場合とでは、同じ「循環的役割」を措定したとしても、それらを一律に處理し得ない問題がそこに殘されるのではないだろうか。その點については獨立的と從屬的の對概念によって解決しようと試みてはいるものの、循環によって意味される社會のメカニックの分析については、現代社會に關する限りそうとうの困難が豫想されるものと言わねばならないであろう。

それはともかくとして、社會構造の理論は本書の出現によって新らしい局面に到達したといわれるように、本書は、まさに問題の書として讀まれるべきであろうと思う。（一九五七・一一・四）

（十時嚴周）

Carl J. Friedrich and Zbigniew K. Brzezinski; Totalitarian Dictatorship and Autocracy

1956, xii, 346 pp. Harvard University Press

C・J・フリードリッヒ
Z・K・ブルツェツィンスキー　共著

『全體主義的獨裁と專制』

一

フリードリッヒの全體主義研究は、すでに一九三〇年代後期にその構想ができあがり、ほぼ完全な草稿がととのえられていた。しかしながら、未だナチやソヴィエトに關する知識も理解もせまく、大戰勃發するや、それを印刷にふすことを取り止め、つづく數年のあ